

1. 基本理念と基本コンセプト

本園のリニューアルにあたっての基本理念と基本コンセプトと基本方針は、既定計画となる「徳山動物園リニューアルF S調査検討業務報告書」（平成21年2月）を踏襲して、以下のように設定する。

① 基本理念

周南市の動物園は、まちづくりの「心臓部」として、多くの人を惹き付ける魅力的なものである必要があり、そのためには、まず動物や自然環境のすばらしさを体感し、地球環境に親しみを抱いてもらうことが第一義であると思われる。また、それらを楽しみながら自然と伝えるには、エンターテインメント性を充実させた動物園を目指すこと、いわゆる「エデュテインメント^{※1}」という発想が大切だと考える。

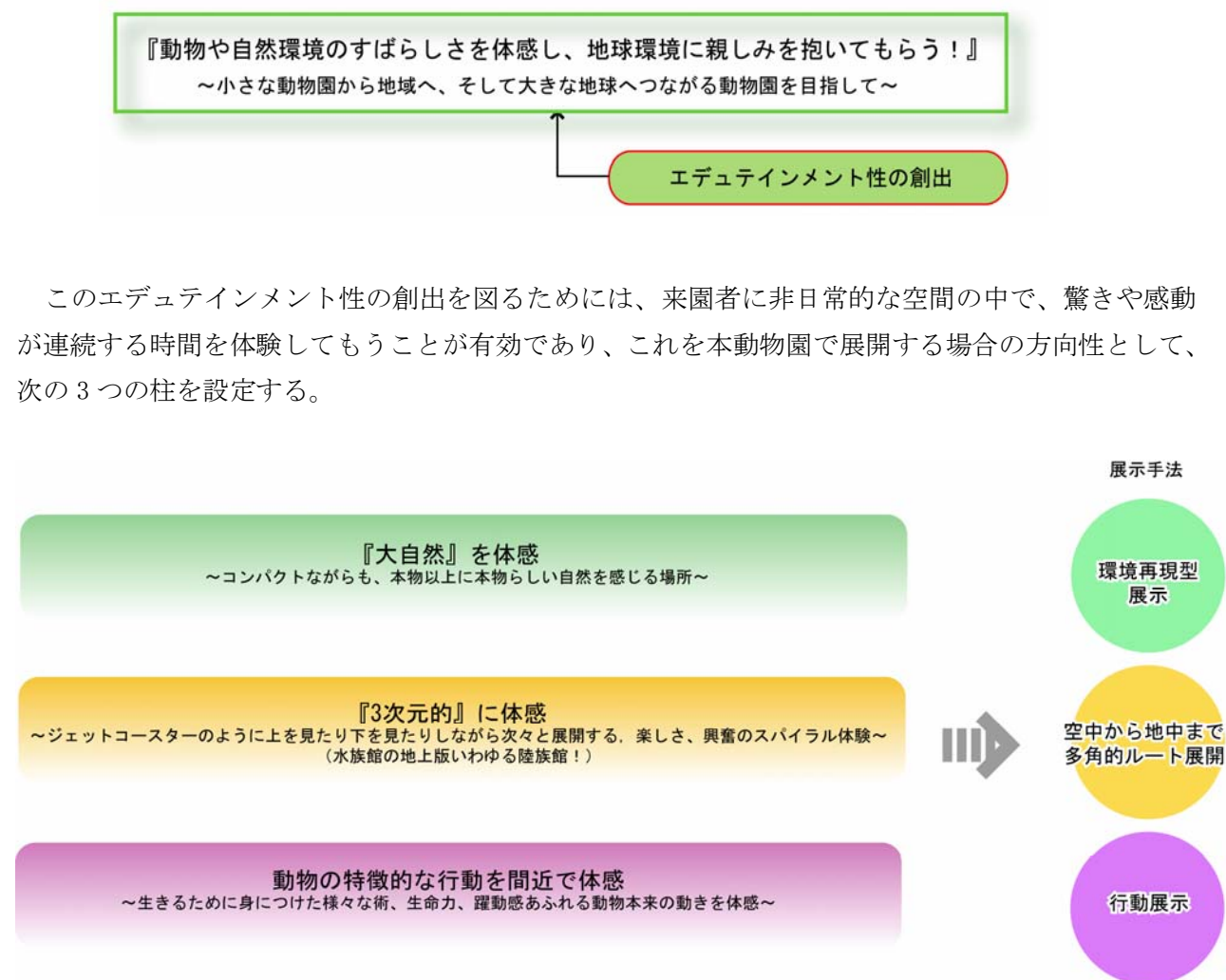


図 エデュテインメント性創出の方向性と展示手法

※1 エデュケーション（教育）とエンターテインメント（娯楽）を組み合わせた造語。楽しみながら遊んでいると、いつの間にか自然と知識が身につくことができること。

② 基本コンセプトと基本方針

動物園の果たすべき役割や、徳山動物園としてのあるべき姿を踏まえつつ、観光交流都市・周南市を牽引する重要な観光施設として、地域経済の活性化に資する役割が求められていることから、他都市の動物園とは異なる周南市のまちの顔、まちの個性となるような動物園の実現を目指す。

そのため、動物園の敷地特性やコンパクトではあるが市街地の中にある『まちなかの動物園』としての立地特性を考慮し、動物園再生の基本的な方向性として基本コンセプトと基本方針を次のように設定する。

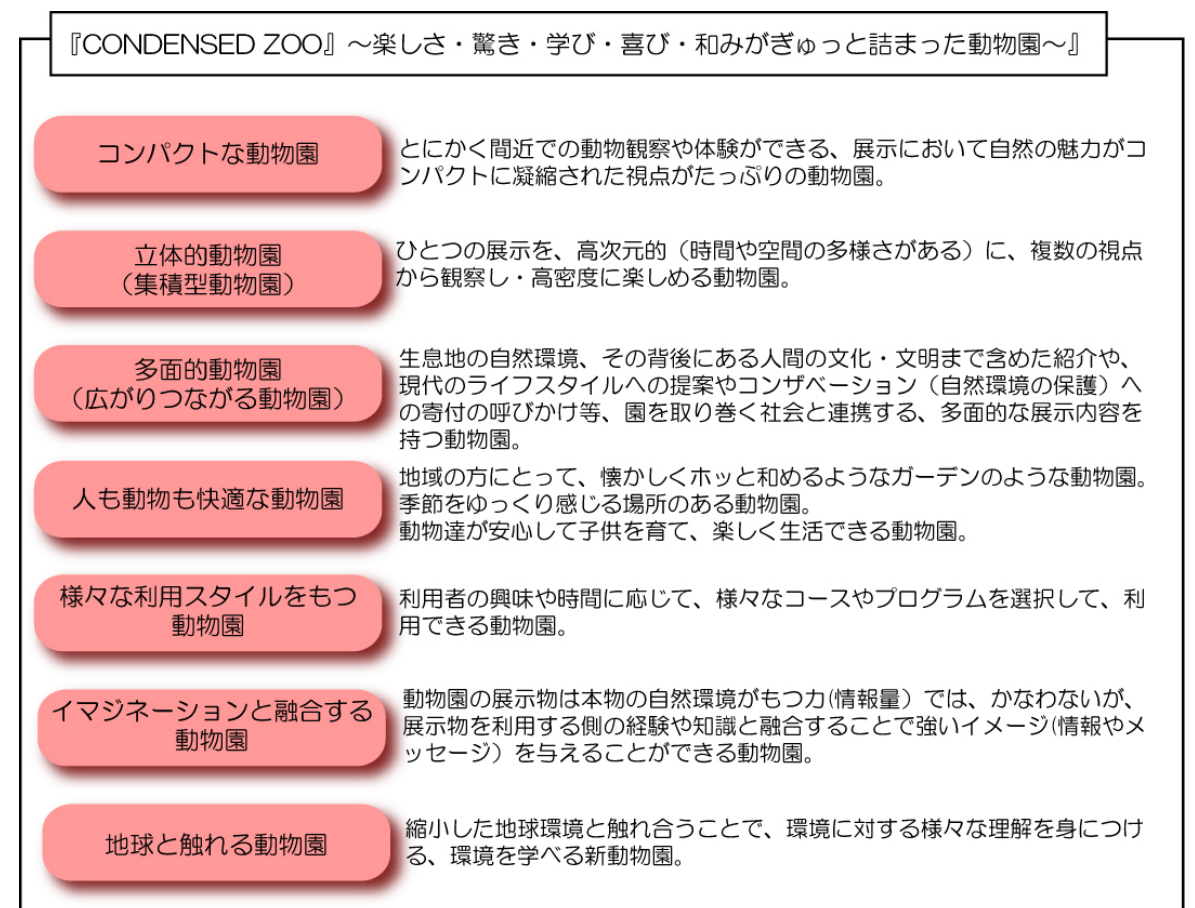


図 徳山動物園の基本方針

2. 徳山動物園の果すべき役割とその方策

リニューアルにあたっての基本的な方向性と前章で整理した前提条件から、周南市における徳山動物園の果すべき役割（目標像）を、概ね以下に示す4つのポイントに整理する。

1. 観光都市の拠点となる動物園

周南市観光ビジョンでは、「人と人が交流する豊かさと元気あふれる観光都市・周南」をビジョンの目標として、平成26年度に110万人の観光客目標を目指している。

また、JR徳山駅周辺は、中心市街地活性化基本計画として、市の都市拠点として、駅の南北及び徳山下松港が一体となった「顔づくり」が進められている。さらに、緑の基本計画では、中心市街地周辺地区は「緑化重点地区」として市民の憩いの場の機能の充実と緑の保全が求められている。

動物園は、中心市街地活性化と連携した周南市の新たな観光拠点として、また、市民の憩いの場、レクリエーション機能の充実や緑の保全など周南市のまちづくりの起爆剤となることが求められる。

2. 動物を通じた環境学習の拠点となる動物園

周南市まちづくり総合計画では、「いのちに学ぶ」プロジェクトとして、徳山動物園に生物系の教員、企業研究者などの参画を得て、学校教育、生涯学習の場となるとともに、生命科学の研究拠点となる場の創出を計画している。また、CAA提言「こんな動物園だったらいいね」においても生涯学習の場としての活用があげられている。

動物園は、周南市の動物を通じた環境学習拠点として、市民が楽しみながら学び、交流し、自然環境に対する見識を向上する場となることが求められる。

3. 市の環境モデルとなる動物園

周南市環境基本計画では、「豊かな自然をはぐくみ 未来へはばたくまち 周南～自然の恩恵を将来の世代とわかちあうために～」を市の目標像として、重点施策として、「地球温暖化防止対策の推進」、「自動車公害対策の推進」、「ナベヅル保護対策の推進」、「環境を通じた地域交流の推進」が掲げられている。

動物園は、理想的な環境モデルとして、官産学が協力して先行的に環境活動を実践することが求められる。

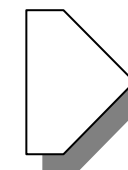
4. 健康な動物を次世代に引き継ぐ動物園

1993年、当時の動物園の国際組織であった世界動物園機構が「世界動物園保全戦略」中で、21世紀の動物園の進むべき方向として、「環境資源センター」の考え方が提示された。

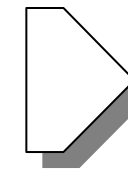
また、日本でも環境省が「絶滅のおそれのある野生動物の生息域外保全に関する基本方針」を示し、動物園で動物を飼育する生息域外保全の目標及び目的について、「緊急避難」、「保険としての種の保存」、「科学的知見の集積」であると方針を示した。

動物園は、周南市における、動物の種を保全する拠点として、飼育する動物の健全な繁殖を進め、地域の生物多様性の保全に貢献する場となることが求められる。

取組み方策



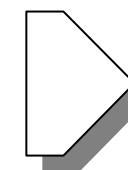
- ① 徳山動物園ならではの新たな動物園のあり方を発信
- ② 周南市の産業活動への経済的波及効果が高められるような利用の展開
- ③ 動物園への効率的かつ多様なアクセス手段の整備



- ① 市民が参加しやすい環境学習の展開
- ② いき物の「いのち」の大切さを実感する学習
- ③ 周南市のいき物に興味を持ち、地域の生物多様性を守る学習
- ④ 地球上のいき物の生物多様性に寄与するライフスタイルの学習



- ① 地球温暖化防止に向けたエネルギーのモデルパーク
- ② 自動車公害対策への取組み
- ③ ナベヅル保護の市街地サテライト拠点
- ④ 環境ツーリズムの拠点



- ① 動物の肉体的・精神的健康の維持
- ② 種の保存を念頭に置いたコレクション計画
- ③ 周南市の生物多様性を向上する生息域内保全

【目標像 1】 観光都市の拠点となる動物園

1) 徳山動物園ならではの新たな動物園のあり方を発信

- 動物園が観光拠点となるためには、観光客が「行ってみたい」と思う動機づけになるような展開を図る必要がある。
- 動物園業界では、上野動物園のパンダブームや、よこはま動物園ズーラシアの生態展示による新規オープン、現在の旭山動物園の行動展示によるブームなど、一時的な来園者数の爆発的な増加があった。しかし、地域性の乏しい動物のコレクションや一般的な展示手法は、模倣され、入場者数は減少する傾向にある。
- 動物の具体的な飼育技術などに基づいた徳山動物園ならではの新たな動物園のあり方を実現化し、世界に向けて発信する。

2) 周南市の産業活動への経済的波及効果が高められるような利用の展開

- 観光都市の拠点としては、動物園への来園者が、動物園だけでなく周辺の街中散策や宿泊などを楽しみ、周辺市街地にその経済効果が波及することが求められる。
- 旭川市では 700 万人の観光客年間入込数があり、経済効果は 800 億円といわれている。その内動物園の入園者数が 300 万人であり、単純にその経済効果を算出すると 300 億円程度となる。しかし、その効果は宿泊などの一部の観光業界に留まっている。
- また、旭川動物園の観光は、美瑛や富良野など周辺観光地とネットワークした観光ルートが確立されており、相乗効果による観光の活性化が図られている。
- 中心市街地活性化事業に合わせて、まち全体で観光客をもてなすための仕組みをつくる。
- 動物園と市内の公園緑地、周辺の主要な観光地との利用のネットワークのあり方を検討する。

3) 動物園への効率的かつ多様なアクセス手段の整備

- 周南市街地には、新幹線駅となる JR 徳山駅の他、道路網では山陽自動車道、徳山西 IC、徳山東 IC、中国自動車道、鹿野 IC の他、国道 2 号線と広域的な交通網が発達している。
- 一方で、動物園周辺の道路状況は、渋滞や地区内幹線道路が乏しいなどの問題があるとともに、動物園の駐車場のキャパシティにも限界がある。また、歩行者道路も徳山駅から楽しみながら歩けるポテンシャルはあるが、観光面ではさらなる改善が求められる。
- 現在国道 2 号線の高架化などの事業が進行中であり、動物園への交通アクセスも今後変更する可能性がある。
- また、観光客が動物園に集中した場合、大型バスや乗用車の進入など周辺住環境への影響も懸念される。
- 動物園の駐車場位置及び、そのアクセスルートについては、中心市街地活性化事業等の関連事業と連携して検討する必要がある。
- 公共交通機関の充実とその利用者への優遇措置など、公共交通機関の利用促進を図る。

【目標像 2】 動物に関する環境学習の拠点となる動物園

1) 市民が参加しやすい環境学習の展開

- 動物園は、周南市が市民のために整備する環境学習施設であり、環境学習の主役は市民である必要がある。
- 市民が環境学習に参加しやすいように学校教育との連携や、入場優待制度などの仕組みづくり、市民来園者の快適なアクセスなどにより、市民が参加しやすい環境を提供する。
- 環境学習への参加は、学習者としての参加だけでなく、市民ボランティアによるインタープリターが観光客などに学習の成果を発表するなど、環境学習の進展と共にその達成感を満足できる環境を提供する。

2) いき物の「いのち」の大切さを実感する学習

- 環境学習の初期段階では、動物への興味を誘発することが重要である。
- 動物の「いのち」を感じることは、動物に対する興味の初期段階となり、自然環境や生態系に関する興味の入り口となる。
- 動物の「いのち」を感じる学習では、来園者が「いのち」の大切さを楽しく学ぶためのソフトハードの両面を充実させる。
- 現在の小動物のタッチングなどをさらに発展し、動物の能力や生態なども体感できるような展開を図る。

3) 周南市のいき物に興味を持ち、地域の生物多様性を守る学習

- 徳山動物園では、八代盆地に飛来するナベヅルの保護活動に取り組んでいる。
- 地域の生物多様性は、外来種問題や生息地の減少などにより、年々低下しつつあり、市全体での取組が必要となっている。
- 一般的な動物園では、地域の動物を紹介するに留まっているケースが多い。
- 市民の身近な動物に感ずる文化を醸成するために、地域に生息する身近な動物との接し方や、動物を保全する方法など、周南市全体の生物多様性を向上する環境学習を楽しくわかりやすく提供する。

4) 地球上のいき物の生物多様性に寄与するライフスタイルの学習

- 現在、地球上に生息するいき物は年間 4 万種もの種が絶滅しているといわれている。
- いき物が絶滅する原因は、地球温暖化や水質汚濁、森林破壊、動物の密猟など多様な要因が組み合わされ、地球規模でのライフスタイルを見直さなければならない時期がきている。
- 循環型のライフスタイルなど、市民が実生活の中で実践できる環境学習を展開するために、地球上の生物多様性と市民のライフスタイルの関係を楽しくわかりやすく提供する。

【目標像3】 市の環境モデルとなる動物園

1) 地球温暖化防止に向けたエネルギーのモデルパーク

- 地球温暖化を抑制するために、京都議定書では二酸化炭素の排出抑制が各国間で規定され、自然エネルギーの活用技術の向上と波及が急務となっている。
- 地球上の動物も地球温暖化によりその生息環境が疲弊しつつあり、生物多様性の観点からも地球温暖化防止は大きな課題となっている。
- 周南コンビナートでは、水素を利用した燃料技術などの研究も進みつつあり、地域固有の新エネルギーの開発も進みつつある。
- 徳山動物園を地球温暖化防止の実践的な先行モデルとなるエネルギーのモデルパークとして、来園者に新たなライフスタイルを提案できる施設とする。

2) 自動車公害対策への取り組み

- 動物園への来園者を含めた、観光客が増加すると、市街地内での自動車利用が増加し、渋滞などによる排気ガスの増加が懸念される。
- 観光地ではパークアンドライドなどの導入により、観光地となる市街地内の自動車交通を抑制する対策などが実践されているケースもある。
- 市街地内で、自動車を利用せず、歩いたほうが楽しいまちづくりは、観光客にとっても都市観光の魅力となる。
- 都市観光循環バスなど公共交通機関の利便性の向上を図る。
- 自転車での移動や、歩いて楽しいまちづくりに向けて、まちなかの動物園としての動物園の雰囲気や園外でも感じられるような演出を中心市街地活性化等の事業とともに展開する。

3) ナベヅル保護の市街地サテライト拠点

- 八代盆地に飛来するナベヅルの渡来数は年々減少しており、その要因としては八代の自然環境の変化、特にナベヅルが安全なねぐらとして使っていた山間水田の荒廃が進んだことが一番の原因とされている。
- ナベヅルの保護活動内容や、ナベヅルが飛来するための環境づくりなどについて、多くの市民や観光客が来園する動物園において、積極的に情報提供し、ナベヅルが周南市に飛来する付加価値を高める。

4) 環境ツーリズムの拠点

- 周南市には、ナベヅルや棚田、京都大学の演習林であった周南緑地などの自然環境や、観光農園、環境配慮型の周南コンビナートなど環境観光につながる多くの資源がある。
- 環境を通じた地域交流の活性化は、市民が地域の環境に目を向けるきっかけを提供し、環境をいかした産業の活性化が期待できる。
- 多くの市民や観光客が来園する動物園は、関連施設やイベント等の情報提供や動物園ツーリズムの開催など環境ツーリズムの拠点としての機能を発揮させる。

【目標像4】 健康な動物を次世代に引き継ぐ動物園

1) 動物の肉体的・精神的健康の維持

- 動物の管理手法として、動物福祉の観点から環境エンリッチメントという概念が提示され、多くの動物園で実践されつつある。
- 動物園での飼育環境は、動物たちが長年かけて適応してきた本来の生息地の環境と比較すると、どうしても、狭く、単純で、変化が少ないものになりがちである。そこで、こうした飼育環境に工夫を加えて、環境(environmental)を豊かで充実(enrich)したものにしようという試みが環境エンリッチメントである。
- 自然界から預かっている大切な動物たちのために清潔で安全な飼育環境を確保する。
- 環境エンリッチメントによる動物福祉の向上を図り、動物の肉体的・精神的健康を維持する。

2) 種の保存を念頭に置いたコレクション計画

- 欧米の動物園では、動物の飼育環境に対する研究が進み、健全な繁殖のための様々な取組が実践されつつあり、飼育面積などの飼育環境に対する規定などが定められつつある。この規定を満足しない動物園への動物の委譲は敬遠される傾向にある。
- 野生界の動物は、ワシントン条約などにより制限され、野生界からの新たな動物の取得は非常に難しい状況である。
- 日本国内では、ブリーディングローンなどにより、新しい血統を取り入れ、近交劣化を防止する対策が講じられつつあるが、希少動物では国内での飼育数が限られているとともに、アジアゾウなどは繁殖実績も乏しく、国内の動物のストックも減少していく可能性がある。
- 北海道の旭山動物園では、寒冷地の動物を主体としたコレクション計画をたて、特徴をもたせるとともに、機構に応じて動物が活発に動き回る高効果を発揮している。
- 徳山動物園では、他園との連携を含めて、種の保存に寄与するコレクション計画を策定し、継続的に動物種を飼育できる環境を整える。

3) 周南市の生物多様性を向上する生息域内保全

- 徳山動物園では、八代盆地に飛来するナベヅルの保護活動に取り組んでいる。
- 地域の生物多様性は、外来種問題や生息地の減少などにより、年々低下しつつあり、市全体での取組が必要となっている。
- 都市での市民生活は、自然界の動物と接する機会が減少しており、地域の自然環境に対する理解が難しくなっている。
- 生息地での積極的な保全活動やその情報提供などを展開し、地域の生物多様性保全拠点とする。